

西大塚村の安養寺

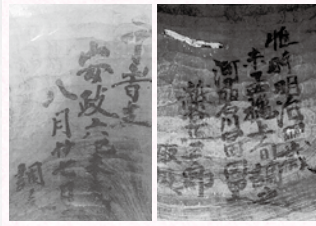
西田 孝司 (松原市文化財保護審議会)

vol.229

松原歴史ウォーク



▲安養寺住職の墓 (立部・南恵我之荘の小土墓地)



▲太鼓の胴中に見られる墨書 (左:安政6年、右:明治4年)



▲安養寺本尊 (左) と旧宣正寺仏 (右)



▲安養寺 (西大塚1丁目) 山門から本堂・鐘楼をのぞむ。

浄土真宗本願寺派の変遷 渡辺康雲作の阿弥陀如来像

全国で五番目に巨大な河内大塚山古墳を東側にのぞむ西大塚一丁目に、浄土真宗本願寺派の安養寺が建っています。山号は紫雲山といいますが、江戸時代以降、西本願寺を本山として、丹北郡西大塚村の檀那寺として信仰を受け継いできました。

昭和四七年(一九七二)に再建された本堂に二体の阿弥陀如来立像が祀られています。中央に立たれているのが本尊ですが、その右側に客仏が見られます。本尊は信仰の対象であり、近かに接することは出来ないかもしれませんが、客仏は玉井教雄住職のご好意で、調査ができました。様式から二体とも江戸時代前半ごろの作と考えられます。

客仏の背面に「宣正寺門徒但馬国七味郡村岡村大向総道場」と刻まれています。日本海側の但馬国、今の兵庫県で、七味郡村岡とは江戸時代、七美郡村岡村を指し、現在の美方郡香美町村岡区村岡にあたります。山名氏の村岡藩が置かれた村岡の中心街を流れる湯舟川の対岸に広がる地域が大向でした。その地に浄土真宗本願寺派の宣正寺があり、同寺の本尊だったのです。昭和三十年代に廢寺となったのですが、その時、住職として寺を守っていたのが安養寺現住職の父、玉井教泉氏でした。同氏がのち、安養

寺住職に就かれた際、宣正寺阿弥陀如来像を客仏として移されたものです。

本像はホゾ木で台座が組み合わさっているのですが、ホゾ木を抜くとそこには「康雲」の文字が墨書され、刻印もおおされていきました。康雲の姓は渡辺氏で、京都の岡崎(現京都市左京区)に住み、西本願寺に所属していた仏師でした。西本願寺派の寺々の本尊を各地でたくさん彫っていましたが、松原でも高木村(北新町)の円成寺や反正山村(上田)の善法寺(廢寺)などの本尊をつくっています。

玉井住職に教えていただいたのですが、この康雲の文字が、安養寺本尊の阿弥陀如来像にも記されているということでした。私は実見していませんが、遠く離れた両像が同じ本堂内に祀られ、康雲作という深い縁を感じずにはいられません。

本堂軒先には太鼓が掛けられています。本堂は、これも今回、新たなことがわかりました。太鼓は数年前に牛皮が張り替えられましたが、もともとは江戸時代末期につくられ、明治初期に修理していました。ケヤキの胴中には「河州石川郡富田村細工主嘉右衛門(安政六日未歲八月廿七日)」と「明治四歲(中略)河石川富田里紙谷正三郎」と書かれていました。安政六年(一八五九)八月に、富田村、今の富田林市若松町にいた細工人の嘉右衛門がつくったものです。それを

明治四年(一八七二)、同村の紙谷正三郎が再度取り扱ったのです。

幕末期、太鼓がつくられた十年ほど前、安養寺には「一来房」という僧侶がいたようです。本市立部と羽曳野市南恵我之荘にまたがる小土墓地は、立部や西大塚の共同墓地です。墓地を入ってすぐ左側(西側)の道路際に、古い和泉砂岩が目につきます。安養寺を守っていた「一来房」の墓です。表面に「池坊門人 一来房」の側面右側に「嘉永四年辛亥四月廿二日」、左側に「西大塚村安養寺住」「台石に「社中」とあります。

池坊は華道家元として有名ですが、もともと僧籍を持ち、華道は仏に供える仏花からおこったといわれています。嘉永四年(一八五二)四月に亡くなった安養寺の僧が池坊の門人として名をなしており、檀家だけでなく、幅広く華道の世界でも活動していたことが想像できます。池坊の「社中」によって建立されているのも、その証でしょう。

昭和五十六年(一九八一)四月、本堂再建十周年を記念する法要が行われましたが、この時、大谷光照西本願寺前門主が来寺され、御親修の荣誉に浴しています。また、教泉氏が長年、皇居の勤労奉仕を続けられていたことから、その死に際し、平成十年(一九九八)、宮内庁の持従を通じて、天皇・皇后両陛下からいただいたお言葉を書いた石碑が本堂前に見られます。